祐天寺仁王像縁起

伊藤　丈

正徳年間（一七一一～一七一五）のことである。増上寺第三十六代法主祐天上人は、六代将軍家宣へ仁王門ならびに仁王像造立の内願を認めた趣意書を、寺中の役者義潭に托し、弟子祐海にはかつて上人が若年に念仏修行した目黒の善久院に、それを建立せよという遺命を伝えていたのであった。

義潭は、上人の示寂したのち、是が非にもその宿望を叶えるべく、ひたすら好機の至るのを待ち、ついに享保十九年（一七三四）九月四日、上人の趣意書一通と自らの願書を添えて、寺社奉公井上河内守に提出したのである。義潭がこの行動を起こすに至った背景には、おそらく、これよりさき享保七年（一七二二）四月六日、月光院が八代将軍吉宗へ内々に寺号改名を願い出たことで、善久院はそのご威光をもって祐海の望む通りに祐天寺と改唱され、また寺域には開山祐天上人廟所と、本堂、書院、阿弥陀堂、鐘楼等の諸堂が整い、今こそ上人念願の仁王門と仁王像を備えるに絶好の期と判断できる条件が充分に具っていたからに相違ない。

元文三年（一七三八）二月五日、上人のこの大望は成就した。寺社奉公牧野越中守より祐海あての呼状が届き、翌六日、松平紀伊守屋敷の内寄合において、祐海は仁王安置許可を仰せ渡された。仁王門は享保二十年（一七三五）四月十一日に造営、仁王像は、同年四月中に神田に住む大仏師竹崎石見に、五代将軍綱吉の息女竹姫が造像を依頼していたのである。

同年八月二十三日、かねて依頼の仁王像が完成との連絡を石見より受けた祐海は、ただちに寺より人足六人と、名主永井三右衛門の手代三人の計九人を石見方に差し向け、夜五時過ぎにまず一躰を、同月二十六日の同刻にもう一躰を祐天寺に運び入れ、今日のお上の仁王安置許可を久しく持っていたのだった。実に、上人が家宣に趣意書を認めた日から、早や四年の歳月が流れている。

元文三年三月八日より十日までの三日間、仁王像安置の練供養が、寺内寺外合わせて五十僧余の武衆により厳かに奉修された。

仁王像の開口阿形（密迹金剛）と開口吽形（那羅延金剛）は、その像高いずれも七尺寸、肩幅二尺七寸の筋骨隆々たる体躯を現わし、門の西と東にそれぞれ屹立して、手には独鈷杵を振り翳し、両足は轟然と大地を踏み締めて、息呑むほどの瞋眼で地上を見下ろし、山内に闖入する一切の邪鬼を撃ち攘って、本寺に参詣する老若男女すべてを厄難から守護り、俗世の悪河に沈淪するわたしたちを救い、さらに阿弥陀仏の教えの光りの中に、こよなく善導してやまないのである。